

大聖世尊章（だいししょうせそんしょう）

それつらつら、人間のあだなる体を案ずるに生あるものはかならず死に歸し・盛んなるもののはついに衰うるならいなり、されば、ただいたずらに明かし・いたずらに暮して・年月を送るばかりなり、これまことに・なげきてもなおかなしむべし、このゆえに・上は大聖世尊よりはじめて、下は悪逆の提婆にいたるまで・のがれがたきは無常なり、しかればまれにも受けがたきは人身・あいがたきは仏法なり、たまたま仏法にあうことを得たりというとも・自力修業の門は末代なれば、今の時は出離生死のみちは かないがたきあいだ、弥陀如来の本願にあいたてまつらずは・いたずらごとなり、しかるにいますでに・われら弘願の一法にあうことを得たり、このゆえに・ただねがうべきは極樂浄土・ただのむべきは弥陀如来、これによりて・信心決定して念仏申すべきなり、しかれば・世のなかにひとのあまねくこころえおきたるとおりは、ただ声に出して・南無阿弥陀仏とばかりとなうれば、極樂浄土に往生すべきようにおもいはんべり・それはおおきにおぼつかなきことなり、されば、南無阿弥陀仏と申す六字の体は・いかなるころぞというに、阿弥陀如来を一向にたのめば・ほとけその衆生をよくしろしめして、すくいたまえる御すがたを・この南無阿弥陀仏の六字に・あらわしたまうなりとおもうべきなり、しかればこの阿弥陀如来をば・いかがして信じまいらせて・後生の一大事をば たすかるべきぞなれば、なにのわずらいもなく・もろもろの雑行雑善をなげすて、一心一向に弥陀如来をたのみまいらせて・ふたごころなく信じたてまつれば、そのたのむ衆生を・光明を放ちて・そのひかりのなかに摂め入れおきたまうなり、これをすなわち・弥陀如来の摂取の光益にあずかるとは申すなり、または・不捨の誓約ともこれをなづくるなり、かくのごとく阿弥陀如来の・光明のうちに摂めおかれまいらせてのうえには、一期のいのち尽きなば・ただちに真実の報土に往生すべきこと・その疑いあるべからず、このほかには別の仏をもたのみ・またよの功德善根を修しても・なにかわせん、あらとうとやあらありがたの阿弥陀如来や、かようの雨山の御恩をば・いかがして報じたてまつるべきぞや、ただ南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と声にとなえて、その恩徳をふかく報尽申すばかりなりと・こころうべきものなり、あなかしこ あなかしこ

大聖世尊章の大意

人間のはかないようすをよくよく考えると、命あるものはかならず死にいたり、盛んなるものは最後には衰えてしまうのが世のならいです。それなのに、むだに日を過ごしているのは嘆かわしいことです。

釈尊から五逆十悪の提婆に至るまで逃れることのできないのは、無常のことわりです。私どもは、受けがたい人間に生を受け、聞きがたいみ仏の教えに遇うことができませんでした。今は末法の世ですから、自力の修業によっては迷いの世界を出ることができず、ただ阿弥陀如来の本願によるしかありません。今、その教えに遇うことができたのですから、浄土を願い如来をたのみ、信心を決定して念仏を申すべきです。しかし世間の人は、信心がなくても、南無阿弥陀仏と念仏しさえすれば浄土往生ができるように思っています。それは大きな心得違いです。

南無阿弥陀仏の六字とは、阿弥陀如来をひたすらたのみたてまつる人を、如来は救いになるをいういわれをあらわされているのです。ですから自力にたよることをやめ、一心に阿弥陀如来をたのみ、二心なくおまかせするならば、如来はその人を光明を放っておさめとつてくださるのです。このことを撰取の光益といい、不捨の誓益ともいいます。このように阿弥陀如来の光明におさめとられているのですから、この世の命が尽きたら、ただちに浄土に往生することは疑いありません。このほかに別の仏をたのみ、また他の行や功德をおさめても、なんのやくにもたちません。

ああ、なんと尊くありがたい阿弥陀如来でしょう。その広大なご恩に報いるには、ただ南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏して、仏恩を報じるばかりと心得るべきです。